

平成 22 年 4 月 19 日現在

研究種目：基盤研究(B)  
研究期間：2007～2010  
課題番号：19320021  
研究課題名（和文） 兜率天往生の思想とかたち

研究課題名（英文）Rebirth in Tusita Heaven (Tosotsuten) - Forms and Thoughts -

## 研究代表者

泉 武夫 (IZUMI TAKEO)  
東北大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：40168274

研究代表者の専門分野：人文学  
科研費の分科・細目：美学・美術史  
キーワード：美術史 宗教学

## 1. 研究計画の概要

本研究は、古来より信仰があった弥勒の造像造画活動のなかでも、鎌倉時代に新しい局面を迎える弥勒上生信仰とその造形を研究し、兜率天往生思想との教学的関連を探ろうとする。

## 2. 研究の進捗状況

(1)日本に残る兜率天曼荼羅図の7割近くの調査を終了した。京都・興聖寺本、大阪・延命寺本、東京国立博物館本(旧広島明王院本)、滋賀・成菩提院本などである。このうち興聖寺本はもっとも制作年代が早いもので、延命寺と東京国立博物館本がそれに続くことが確認できた。また図様は興聖寺本と延命寺本が、縦長と横長の相違はあるものの、若干類似する点が認められる。しかしそれ以外では各作例の独自性が強く、観経変相図の場合の当麻曼荼羅のような規範的図様は形成されなかったことが確認できた。

(2)中国の兜率天をめぐる造形について、中国北西部の現地調査を行うことができた。

敦煌を含む河西地区の石窟の現地調査では、敦煌の弥勒経変相図およびその一部をなす兜率天浄土図、その近隣の文殊山万仏洞の弥勒経変相図の現地調査は、大きな成果が得られた。万仏洞は西夏時代の壁画で、日本の鎌倉時代に新たに展開する兜率天曼荼羅と図樣的淵源を共通する可能性がある。壁画の図様は一部しか図版として公開されていないため、実見のうえ弥勒経変による兜率天宮図であることが確認できたことは大きい。

(3)中国南部の日宋交流の拠点であった寧波周辺の仏教遺跡を調査し、紹興の柯岩弥勒仏、台州の兜率寺跡の存在など、五代から宋にか

けての弥勒信仰の形跡を確認できたことも成果のひとつである。日本の鎌倉時代の弥勒信仰と兜率天曼荼羅の直接的な流入経路は、この寧波周辺からと想定され、具体的な足跡がわずかでも残されていることの意義は大きいと考える。

## 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している

(理由)

現地調査については当初計画の研究対象が予定通りに実施できている。

## 4. 今後の研究の推進方策

(1)未調査の日本中世の兜率天曼荼羅について調査を行う。

(2)まだ未調査の朝鮮半島の弥勒像の遺品について調査を検討する。

## 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①泉武夫、特異な星辰神の図像とその象徴性、佛教藝術、309号、査読有、2010年、13-39頁

②泉武夫、仏教美術史研究の近年の動向と隣接諸学との接点、日本宗教文化史研究、21号、査読無、2007年、48-56頁

[学会発表] (計1件)

①泉武夫、東アジア宗教におけるイメージ・図像・象徴への美術史的アプローチ、印度学宗教学会学術大会、金沢大学、2009年5月

30 日

〔図書〕（計 1 件）

①泉武夫・加須屋誠・山本聡美共編著、中央  
公論美術出版、国宝六道絵、2007 年、195-214  
頁